

第1章 戦場

従軍生活

女学校卒で情報通信の仕事

ながらあきこ
長柄昭子さんのお話から

私は、昭和九年（一九三四年）に桑園尋常小学校に入学しました。ちやうど私たちの年から教科書が変わって、「すすめ すすめ へいたいすすめ。」という内容から始まるようになりました。当時は国語とは言わないで、読み方と言っていました。修身というものもあって、道徳のことを習いました。

○支那事変 日中戦争に
対する、当時の日本側の
呼称。

私が小学四年生の時に支那事変が始まりました。兵隊の慰問や出征兵士を送るといったことが毎日のように続きました。しかし、授業には差し支えありませんでした。

○旗行列 多くの人が手
に小旗を持って、街など
を行列で練り歩くこと。

そして、女学校に行ってから太平洋戦争が始まったのです。ただ、その頃は、昭和十六年（一九四一年）で、初めのうちは、シンガポールの陥落など、日本が勝ったニュースしか入ってきませんので、夜はちやうちん行列をしたり、昼間は旗行列をしたり、みんな戦勝気分でした。ところが、昭和十七年（一九四二年）四月になると、東京に初めての空襲があり、だんだん戦争もきびしくなってきた、防空演習を学校でもするようになりました。防空演習というのは、焼夷弾という爆弾が民家に落ちるので、みんな一列に並んでバケツに水を入れて送っていき、それをかけて消すというものです。

○焼夷弾 火災を引き起
こすために作られた爆
弾。

それから、当時は師範学校や大学に進学する人、病弱の人、家が農家の人、商売の人以外は全員が就職すると国で決められたのです。それで、軍需工場をはじめ、道庁や市役所、NHKなどと書いた紙が学校から来るのです。それで、自分たちで第一志望、第二志望と印をつけて学校に出しました。私は北部軍司令部を志望しました。なぜかという、当時、軍隊は私たち

○監視廠 一地にとどまり敵の動静を見張る所。

のあこがれだったからです。今思えばおかしいのですけれども、軍隊は華やかでいいという感じで、十人ぐらいの枠に二十何人の志望者がいたのです。それで、抽選になったのですけれども、私はうまく当たりまして、北部軍司令部に行くことになりました。

四月に入り、八校の女学校から全部で二百四十人ぐらいが集まったのです。そして、市立高女だった今の中島中学校に教育機関があり、将校と下士官がいて、そこで敬礼の仕方や服装など軍隊の中のことを教わりました。

私が勤めていたのは作戦本部です。敵機が飛んできたら、その情報をもらって、その情報を作戦室に流して、いろいろな作戦を立てるといふ非常に重要な建物です。その建物は、敵の飛行機から見つからないように、屋上に草を生やしていました。天井は、爆弾を落とされても壊れないように、厚さ一メートル二十センチぐらいの鉄筋コンクリートで、五百キログラムの爆弾が落ちても耐えられると言っていました。横壁も二重構造になっていて、近所の方たちは、あそこは何だろうとみんな分からなかったみたいです。

仕事はいわゆる情報通信で、電話で情報を伝達する仕事でした。情報を聞く相手は、北海道の中にある監視廠です。監視廠は、札幌以外の小樽や函館などの重要なところであり、そこで飛行機を見つけたら、電話で知らせ



戦勝気分の人々

イメージ図

○参謀 軍隊で作戦を立てたり、指導の任に当たる将校。

てくるのです。私たちは各地域の部署をそれぞれ担当しました。情報台に座って待っているわけです。すると電話が「じーっ。」と鳴りました。電話では、例えば「小樽から一番発見。」などと来るのです。それを聞きながら紙に書きます。そして、「何時何分、味方飛行機、北方に向かって進んでいます。」とか、「高度が何メートルです。」ということを通信紙に書いて、伝令に言うのです。そして、伝令が作戦室に持っていくわけです。

作戦室には、将校や下士官が十人ぐらいいて机に座っています。正面には天井から壁いっばいに北海道の地図がありました。北海道、樺太、青森のところまでが北部軍の担当でした。私たちが得た情報で「小樽発見。」などと言ったら、地図にランプがついて、敵機のこといまして、味方有的时候は、青ランプがついて、敵機のこときは赤ランプがつくようになっていました。作戦室では、そのランプがつくのを見ているわけです。参謀たちはそれを基本にしていろいろな作戦を練ったのではないのでしょうか。それで、これは危険なことになったら、警戒警報を発令するのです。警戒警報は、札幌では何回もかかりました。そして、いよいよ敵機が来ると空襲警報がかかるわけです。警戒警報、空襲警報と鳴りますから、警戒警報の時に避難の用意をされていて、空襲警報になると防空壕に入っって、空襲警報が解除されるまで、そこに黙っているわけです。



作戦室

イメージ図

○玉音放送 天皇自身の肉声による放送。特に、終戦を伝えるラジオ放送を指すことが多い。

電話の情報伝達は、それまで兵隊がしていた仕事なのですが、兵隊が全員戦場に行くことになって千島や樺太などに出たので、その後を女子が埋めたということです。そういう仕事をしていた終戦を迎えました。

私は、八月十五日の終戦の時、偶然、夜の勤務でした。朝に重大放送があるということで、帰らないで宿舎で待つようにという指令が出ていました。お昼の十二時に重大放送がありました。営庭という広い庭に全員集合して玉音放送を聞きました。周りの兵隊たちがみんな泣き出したのです。まさか戦争に負けるなんて思ってもいなかったのですが、そのうちに負けたという話が耳に入ってきて、茫然としてしまいました。

戦争は悲しく、平和は尊いものです。この平和の陰には日本人だけで三百万人もの犠牲があったのです。民間人もそうですし、兵隊たちも死にました。そういう犠牲者があったことを我々の世代の者が感じるのは八月十五日の終戦記念日です。そのときに必ず黙とうをします。そのときには涙が出て胸が痛くなります。私たちの年代より若い方たちも、学校時代に食料が無かったり、学用品が無かったり、苦労しているので。そういう苦労を重ねてきているわけですので、皆さんもそういうお話を伺って、今の平和と比べて、昔の人の犠牲があったのだということを頭に置いてください。そして、これは日本の歴史の一つであるということを頭に置いて、皆さんの力でこれからの明るい未来を作っていたいただきたいと思います。

DATA

平成22年度南区平和事業

聴き取り

- ・平成22年12月10日
- ・駒岡小学校



長柄昭子(ながら・あきこ)さん

- ・昭和2年(1927年)生まれ
- ・札幌市南区在住